

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指 標	評 価 基 準	自 己 評 価	学 校 関 係 者 評 価
						達 成 状 況	評 価
	確かな学力の育成	生徒が主体的に学習に取り組む態度を高めるために、わかる授業を展開する。授業内容によっては、TT指導や支援員の効果的な活用により、きめ細かな指導を実施する。 また、教材研究に努め、ワークシートや資料の工夫、ICTの有効な活用を図る。 家庭学習の充実を図るために課題やプリント・副教材の演習問題など積極的に提示し、実施の有無の確認や評価及び主体的に取り組むための支援に必ず取り組む。	生徒が主体的に学習に取り組むことができ、わかる授業づくりに取り組む。TT指導や支援員の積極的な活用と授業教材やICTの有効活用を取り入れる。	最初に「めあて」を提示して授業に臨み、説明を聞く場面、知識・技能を習得する場面、思考する場面、表現や発表する場面を明確にし、生徒が授業で、知識・技能を習得し、思考・判断・表現する力を育成する。必要に応じてICTの効果的な活用を取り入れ、生徒の学びを支える。授業の終わりでは「自己の振り返り」を行うことで、学びの成果を実感させ、学んだことや意欲・問題意識等につなげ、家庭学習や次時の授業につなげていく。	A ICTを活用したわかりやすい授業が展開されるとともに、学級全体が学習へ向かう態度が向上し、生徒が主体的に学習に取り組んでいる。	生徒による学校評価では、「先生は、授業のめあてを示している」「先生は授業の振り返りを行っている」に対して、「思う」「やや思う」という肯定的な評価がそれぞれ約95%、約91%だったので、ほぼ定着しているといえる。しかし、「めあて」については「思う」が1学期「78%」から2学期「68%」へと下がっているので、学校全体として定期的に確認することが必要と思われる。 また、「授業では学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」に対して、「思う」の評価が1学期「54%」から2学期「62%」に増えている。このことから、本校の研究の柱である「協働的な学び」を日常的に実施する授業者が増えていると思われる。 さらに「先生はICTを活用した授業を行っている」に対して、「思う」「やや思う」の割合が「96%」であった。今後は授業者だけでなく、生徒がICTをどのくらい活用しているのかということについても、検証を検討していきたい。	B ・生徒による評価では、授業での「めあて」の定着が不十分と感じる。「めあて」を提示することにより、生徒が授業にスムーズに臨んでいくことにつながるとともに、「めあて」と「振り返り」はセットと考え、ただ「取り組めている」にとどまらず今後も深めていく必要がある。また、立てた「めあて」に対してただ理解できたかどうかを振り返るだけでなく、どのような方法が理解しやすいかを生徒自身が分析出来たり、学びに対しての意味や価値を自分自身で考えられ、次の学びにつなげていけるようになることが重要だと感じる。今後生徒のICTの活用が振り返りに対してもどのような影響を与えていくかなどの検証により内容を深めていけるとよいのではないかと感じる。併せて、「授業の質問等にきちんと対応している」でポイントが下がっている。これは同一回答者でないかと思われるが、主体的な学習で自主的に考えることは大事なことだが、ただ本人に任せるだけ、考える場面を提供するだけでは成長がない。そのゴールは何で、なぜそう考えたか、その考えがどの面で良くて、どの面で良くないのか、どう考えるべきかなど「導き」が必要と思われる。 ・ICTの活用は、今の時代必要不可欠のアイテムであり、その活用によってわかりやすい授業づくりができ、その結果生徒の学習意欲の向上と学力アップにつながれば喜ばしい。また、若い世代の先生が増えていることで抵抗なくICTを取り入れている授業が増えていることは素晴らしいと感じる。 ・協働的な学びは、授業者がこの趣旨を的確に授業に反映することによって、生徒の達成率が伸びているのは評価する。また、生徒の肯定的な評価が高いので、今後の取組にも期待できる。しかし、保護者アンケートによると「学校は一人一人の学習状況に応じた指導をしているか」の問いに、肯定的な意見が半分にも満たない。生徒の評価とのギャップが気になる。
					B ICTを活用した授業が展開され、思考・判断・表現する力を育成する場面では、生徒は意欲的に授業に取り組んでいる。		
					C ICTを活用した授業が展開され、聞く・考える・表現する場面では、生徒はそれに従って落ち着いて授業に取り組んでいる。		
					D ICTを活用した授業が実施できなかった。また授業への取組に個人差が見られ、集中力に欠ける生徒が見られる。		
			学力向上につながる家庭学習の充実を図るために、各教科で示された学習の取り組み方や家庭学習の方法をもとに、家庭学習への意識を高める。また、生徒が積極的に家庭学習に取り組めるように各学年および各教科で家庭学習課題の提示と確認・評価をしつつ、個に応じた課題提示の工夫をする。	学力向上を図るための家庭学習を習慣化させる。 ①各教科の家庭学習課題を提示する。 ②各学年の実態に応じた自学ノートの取組の充実を図る。 ③定期・習熟度テストへの家庭学習取組表の実施を行う。 ④家庭学習調査を行い、毎日の学習時間目標を平均90分以上とする。ただし、テスト期間中は120分以上をめざす。	A 各教科担任および各学年で家庭学習課題の提示と確認・評価を継続して行い、家庭学習習慣が定着している。(平日90分超、テスト期間120分超)	生徒による学校評価で、「毎日家庭学習に取り組んでいるか」という問いに対しては、学校全体として「思う」「やや思う」という肯定的な回答が1学期「約79%」、2学期「約71%」という結果であった。令和5年度の同調査結果が「約71%」なので、1学期については肯定的な回答が増えている。しかし今年度については、1学期から2学期にかけて肯定的な評価の割合が下がっているのは気になるところである。 学習時間調査(2学期期末テスト後実施)によると、平日の家庭学習時間は個人によってばらつきがあるが、全学年の平均で見ると60分を下まわっており、家庭学習の在り方について再考が必要である。定期テスト前の家庭学習時間は全学年で平日120分間程度確保できている。また、全学年において定期テスト前の学習時間や学習内容などを記録させており(別紙 または あゆみに記録)、日々担任がチェックしている。	C ・家庭学習時間は、定期テスト前はある程度確保されているようだが、家庭学習の調査によると、平均で60分を下回っており不十分と言わざるを得ない。普段から取り組む必要性を生徒自身が感じてくれるとよい。ただし勉強時間の長さも大事だが、その時間内にどれだけ効率的に集中して学習に取り組めたかが重要と思う。また、家庭学習は、生徒自身が自らの状況を考え、計画し、実行できればよいが、何が分からないか分からない生徒には厳しい。保護者アンケートから「家庭学習の習慣が身についていると思うか」との設問に対して肯定的な回答が半分にも満たない。生徒アンケートとの相違がみられ、生徒の自己評価の甘さを感じる。また、保護者アンケートの「一人一人の学習状況に応じた指導」と「家庭学習の習慣」は似た数値にあるが、関係していると思う。この対策として、生徒一人一人が各教科の目標点数を出し、その現状把握が正しいかを学校側で調整し、この目標を達成するために、その子の学習レベルに応じた課題を用意し、また、その量も生徒によって変え、回答結果から弱点を見つけ、そこを指導する必要があるのではないと思う。そのため、今後は、これをAI化できれば、学校の負担も軽減されるのではと思う。(問題→回答の正誤率から弱点を見抜く部分をAIで判別)。 ・平日の家庭学習の取組に向けての再考が必要である。そのための対策として、提出された学習内容の記録を参考に、計画的な家庭学習の仕方についての個々の取組の検討を行ったり、家庭学習の進捗状況が保護者にも分かる形で情報提供したりしていくことも必要ではないだろうか。そうしていかないと、各家庭での指導も難しい。加えて最近では復習アプリなどタブレットを活用して家庭学習をしやすいように環境が整えられていると感じるが、学習アプリなどで生徒自身で学習時間の管理ができたり、簡単に自己分析ができたり、わからない部分をすぐに学び直せるアクションがとれるなど、タブレットだからこそできそうな機能を最大限に取り入れ活用していけるとよいと感じる。
					B 家庭学習の提示と確認・評価を継続して行い、生徒の家庭学習時間にバラツキがあるが、全体としては家庭学習が習慣化している。(平日60分超、テスト期間90分以上)		
					C 家庭学習の定着が不十分であり、全体として家庭学習が停滞傾向である。(平日60分未満、テスト期間90分未満)		
					D 家庭学習の重要性を意識せず、全体として家庭学習時間が不足しており、習慣化にはほど遠い。(テスト期間でさえ60分未満)		
① 学習指導	人権・同和教育の推進	一人一人が認められ、差別や偏見を許さない人権感覚と実践力を養い、安心して活動ができる学校をつくる。	自他の人権を尊重し「差別をしない生き方」ができる力を育てるために、人権集会や人権講演会等を通して、生徒が考える場を設定する。	身近な生活の問題から、自分や周囲の人の人権について考える時間を設定する。 学習テーマは、生徒の実態に応じて設定し、意見交換をする場を設ける。 日常の生徒の様子に応じた指導、助言をする。	A 人権集会や人権講演会等を通して、生徒が一人一人を大切にすることはどうか、そのためには自分はどうしたらよいか考え、意識して行動する。	今年度は、「江津市内に在住されている外国人の方の生活や仕事のようすについて知ること」、「外国人の方との交流活動の大切さについて考えること」をテーマとして、日本語交流クラブ GOTO☆ワンハート代表の山藤美之さんに講演していただいた。事前学習を各学級で実施し、外国人が日本で生活や仕事をするために必要な許可(在留資格)について学んだが、「特定技能」等の用語が生徒には難しかったようである。しかし、事前学習や講演会で話を聞いて、外国人の方の状況や課題について知り、これまでは街中で見かけただけだった外国人の方について考える良い機会になったと、ふりかえりで書いていた生徒が多かった。また、外国人の方と話をする時には山藤さんに教えていただいた「優しい日本語」を使いたいということや、外国人の方との交流活動にこれからは自分も積極的に参加したいという気持ちをもった生徒も多く、「外国人の方が来て良かったと思うことができる江津市になるために、自分にできることは何か考えていきたい」と感想を書いている生徒もいた。江津市にはすでに300人以上の外国人の方が生活されていて、生徒も今後関わりをもつことが予想される。多文化共生社会に生きる一人として、人権感覚を磨き、正しく判断し行動できる人になってほしい。来年度も様々な視点から人権について考える場を作っていきたい。	B ・今年度は外国人の方の生活や交流についての講演を行った。市内でも外国人の居住者が増え、その姿を見かけることも多くなった。そのため、実際に受け入れをされている方から直接話を聞くことはとても有意義なことだと感じる。彼らと共存するにあたって、異なる文化や習慣を知ること大切なことであり、この企画は意義があったと思う。また、多文化共生社会に生きる一人として、「人権感覚を磨き、正しく判断し行動できる人になっしてほしい」とはけだし名言で、人は長幼を問わず、その心構えの重要性を認識し保持しなければならないと思う。 その一方で、日本(江津)の文化や歴史をきちんと学び、習慣を身に着け、日本の良さを自信をもって発信していくような人になってもらいたいし、他人にも自分にも優しい生徒になってほしいと願う。加えて、社会的な流れや変化の穏やかな江津では、素直で優しく育つ子どもが多いが、それゆえの無知・無関心にならないよう、知っている・理解できるというスタンスから寛容的な行動のできる人間性を育てる時間を、今後考え作ってほしい。 ・世界的にもアメリカでは政権が変わり反DEI(Diversity Equity Inclusion)に一気に傾いている。歴史上、多様性は発展の要でありつつ、同時に分断を生み国家崩壊の発端となる弱点でもある。きれいごとだけでない部分も学びながら、どう多様性を実現すべきかを考える必要がある。
					B 人権集会や人権講演会等を計画的に実施し、生徒が人権について考える。		
					C 人権集会や人権講演会等を実施するが、内容が生徒の実態と合わない。		
					D 人権集会や人権講演会等、人権について考える機会が設定できない。		

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学 校 関 係 者 評 価	学 校 関 係 者 評 価
						達成状況	評価		
	学校図書館・読書活動の推進	多様な価値観に触れ、表現力や想像力を育む読書活動を推進する。	学校図書館利用増をめざして読書推進活動を充実する。	「利用しやすい図書館」として、図書館利用者の増加、家庭での読書の習慣化を図る。教科学習においての図書館利用にも一層の活用を推進していく。	A 図書館利用が増加し、自主的な読書が定着（1か月の平均貸出冊数が10冊以上） B 図書館利用が増加し、自主的な読書が定着・習慣化（1か月の平均貸出冊数が5冊以上） C 図書館利用が増加したが、自主的な読書が不十分（1か月の平均貸出冊数が3冊以上） D 図書館利用が増加せず、自主的な読書も不十分（1か月の平均貸出冊数が3冊未満）	入学した1年生に図書館の活用方法の指導をすることで、自主的な読書の定着に繋がると考えた。4月のオリエンテーションで本校図書館の活用方法を指導し、さまざまな分野の本を試し読みできる味見読書を行った。長期休業前には昨年度から全校生徒対象の無制限貸出を実施し、本年も継続している。また、図書館司書が図書スペースで生徒が関心をもつように各テーブルごとに「ひまつぶしBOX」などの展示を工夫して設置した。 4月から12月までの貸出では全校生徒一人あたりの平均13冊となった。学年ごとに見ると1年一人あたり平均が17冊、2年一人あたり平均13冊、3年一人あたり平均8冊である。例年、学年が上がるにつれて貸出冊数が減少する傾向にある。1年生は図書スペースが教室に近く、行きやすい位置であることが貸出冊数の伸びに繋がったと考えられる。2・3年は学年が上がるにつれて図書スペースが教室から遠くなったり、学業や部活動が忙しくなったりすることが1年に比べ平均冊数が少ない原因だと考える。しかし貸出冊数の目標は達していると考え、評価を「A」とした。 また昨年度の目標として、教科全体での活用方法を喚起するなど教職員全体での読書活動推進に取り組みたいと考えていた。夏休みにはさまざまな分野・領域の本を見本に書店から期間を設けて借り、教職員が見られるよう周知するようにしたが、実際に各教科でどれほど図書の活用ができたかの調査まではできていない。来年度以降、教職員の声を聞きながら、図書の活用がしやすい環境づくりにも取り組んでいきたいと思っている。	A	・図書館はオープンスペースのため、静かに集中して読書に臨める環境ではないが、「味見読書」や「ひまつぶしBOX」の展示等、自主的な読書の定着に向けて教職員の方々の真摯な取組が感じられる。このような取組で生徒が気軽に立ち寄れて、利用増につながっているのは大変評価できる。また、学年ごとの様々な試みでも利用促進を促し、その結果貸出冊数が伸びていることも評価できる。職員の方々の努力や工夫があつてのことだと思う。今後は、やはり平均ではなく個人での貸出冊数でクリアできるとなおよいのではないか。 ・先生と図書館担当者として連携し、「この授業に出てきたこの話は、図書館のこの本に…」と紹介できれば、興味はわくと思う。とっつきやすい漫画→小説というパターンも良い。youtube、spotify、ポッドキャストなどの動画や音声コンテンツで興味をもたして、もっと知りたいものを書籍でという連動も良い。例えば、書籍紹介が上手なyoutubeの動画のリンクをQRコードにして、読み込ませて興味をもってから本を手にとってもらうとか、今後学校の授業でも図書館を有効的に活用するような授業展開を模索してほしい。また、学校の調査結果から、読書をする子が多い学年の成績は高いということがわかり、それを踏まえ、調べ学習で積極的に図書館を活用するなど各教科での喚起、環境づくりにもぜひひと取り組んでいただきたい。	A
	個別最適な学び」「協働的な学び」の推進	「主体的な学び」のために各教科等で、他者と協働しながら学び、考えをより広げ深める授業づくりに取り組み、思考力・判断力・表現力の向上をめざす。	各教科等で、生徒が協働しながら学ぶ授業の題材、展開、指導などの工夫を行う。	各教科等の授業で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」の実施をし、生徒が自分の考えを伝え合いながら組み合わせ、より広げたり深めたりするような、よりよい学びをめざす。	A 各教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施し、思考力・判断力・表現力が向上した。 B 各教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施した。 C 複数の教科等で「個別最適な学び」「協働的な学び」のためにICT機器の活用や「協調学習」を実施した。 D 「個別最適な学び」「協働的な学び」のためのICT機器の活用や「協調学習」の実施が不十分だった。	令和5年の5月に職員のICT活用の状況を把握するためアンケートを実施した。昨年度ICTを活用した授業を月1回実施した割合は46%だったが、令和6年の11月のアンケートでは93%に増えている。「プチ研修」を数回開催し、さまざまなアプリの使い方や授業での活用方法を共有した。またICT支援員に助言や指導を求めたりして、学校全体や教員個々での研修を進めることができた。また、1・2年生は「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができている」という問いに肯定的な生徒が92%いた。ただし現在は、ICTの活用と、生徒の「協働的な学び」「個別最適な学び」が結びついている授業実践は限られており、来年度以降は各教科でICTを活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の学びを進め、実践に繋げたい。	C	・ICT機器を活用できなければ社会に通用しない時代になってきた。教師も充実した授業展開をするためには、ICT機器の操作を熟知し、適切に活用できることが前提になっていることから今後も研鑽に励んでいただきたい。また、ICT活用の授業実施の割合が前年度に比して倍増している。支援員や専門家によるアドバイスを受けるなど、先生方の積極的な姿勢が伺えるとともに、生徒も肯定的な意見をもっているため、今後の実践に期待できる。ただ、ICTはただの技術で手段の一つであり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどうすれば実現できるかを考えるときに、ICTありきでスタートするのは手段と目的が入れ替わるリスクがある。道具は使うものであって使われないように。 ・協調学習については、ここ数年の話し合い活動の継続した取組によって生徒自身が他人の考えを尊重しつつ、自分の考えを深め、視野を広げていっている様子が生徒アンケートの結果から見られ大変評価できる。今後も継続していただきたい。	C
② ふるさと・キャリア教育	ふるさと・キャリア教育の推進	将来に生きる大きな夢や希望を育む。「江津の明日を創る人」を育てるために、ふるさと・江津に根ざした各種体験活動を核とした取組を推進する。	地域の教育資源（ひと・もの・こと）を有効に活用し、各学年で系統立ったふるさと・キャリア教育を推進する。	各学年で取り組む活動（修学旅行の企業訪問、事業所訪問、企業学習、上級学校調べ、職場体験等）が系統的に、より一層充実するように努める。また、地域の「ひと・もの・こと」を活用することで、地域の魅力や課題の理解を進める。	A 全学年において、ふるさと・キャリア教育の取組を複数回計画的に実施した。 B ふるさと・キャリア教育の取組を複数回実施した学年と一回実施した学年があった。 C 各学年、ふるさと・キャリア教育の取組を1回実施した。 D ふるさと・キャリア教育の取組を実施できなかった。	1年生は、地元で働く方のお話を聞く機会を設けたり、地元企業を訪問したりした。また、課題探求活動として「ふるさと江津のために、自分に何ができるか考えてみよう」というテーマのもと、5つの分野（観光、交通、福祉、美化、施設他）に分かれて、現地訪問をしたり、地域の方に話を聞いたりしながら、知り得た内容をまとめた。さらに、地域課題探究に取り組む県大生を講師に、話やアドバイスを聞き、探究活動まとめのヒントを得たり、自分の将来の生き方について考えたりする時間を設けた。そして、それぞれの班でプレゼンテーションを作成し、発表会を行った。この活動を通じて江津の良さを再確認し、自分の将来と関連させて考えることができた。2年生は、企業学習として地元江津の企業で活躍されている方の話を聞き、進路選択の視野を広げる機会となった。3学期には上級学校調べを行い、中学校卒業後に学ぶ場についての理解を深める機会とする。3年生は、進路説明会を通じ、中学校卒業後の進路選択について上級学校の先生方のお話を実際に聞くことで、より関心を深めることができた。また、2学期には市内外のさまざまな事業所の協力を得て職場体験を行った。地域の方々の働く姿を見たり、お話を聞いたり、実際に自分で体験したりすることで、今後の生き方を考える機会となった。どの学年も、ふるさと江津の「ひと・もの・こと」のよさを再認識する取組を行うことができた。	B	・郷土意識や郷土愛という概念が希薄になっていく中いつも感じるが、ふるさとキャリア教育はとても肝要なことであり、ここ数年の体系的・継続的な取組が行われている。また、ふるさとキャリア教育で地元企業の訪問等を行うことは、今後の進路選択においてふるさとの選択肢が出てくるため重要である。加えて、地域の農業や漁業等の第一次産業や大工等の職人などの働き方もぜひ知っていただきたい。もはや身近で見ることのない職業となっており、知る機会が著しく減少している。大学→企業以外の働き方もぜひ学んでほしい。 ・今年度は、1年生で「ふるさと江津のために、自分に何ができるか」という課題によって、江津のことを考えたり、地元企業や大学生といった様々な立場の人に話を聞く機会を設けるなど、年々キャリア教育を通じて生徒と関わる関係人口も増え、内容も充実していると感じる。江津市民の一人としての自覚や誇り・愛着を身に着けるよい機会になったのではないかと思う。この取組は生徒のこれからの進学や将来設計に少なからず影響を与えると思うので、今後も継続した取組を望む。また、学年に応じた実践的な学びとなっているため、生徒が自分自身の興味・関心、能力に段階的に気付くきっかけとなり、将来の生き方を考える取組となっている。成人年齢の引き下げにより早い年齢から自立した考えのもてる子を育成していくことが重要であり、引き続き地域、関係各所と連携をとりながら取組を継続してほしい。 ・最近、生徒が居住する地区での各種行事や清掃活動に、親と一緒に活動する中学生の姿も見られるようになった。これもこの取組の成果ではないかと嬉しく思う。	B

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指標	評価基準		自己評価		学校関係者評価	評価
							達成状況	評価		
③生徒指導	生徒指導の充実	教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度を育成する。	望ましい生活習慣の定着とふるまい向上のため、生徒会と連携しながら指導を行う。	生徒会と連携したふるまい向上等を推進し、生徒の基本的生活習慣、規範意識が向上する。 情報モラルについては、家庭への情報提供し、特に「家庭内の約束」の遵守をめざす。	A	生活習慣、規範意識が向上し、ネットトラブル等が起きない	挨拶、返事、靴揃えを基本とし、年間を通じてさまざまな機会を使って繰り返し指導を行った。挨拶の声はまだ十分ではないが、生徒会本部と生活委員会が継続してあいさつ運動を続けている。靴揃えは習慣になってきており、ほとんどの生徒が意識して揃えていた。また、教室の外にロッカーができたことで、荷物を入れるスペースが増え、整理整頓をしやすい環境になった。身だしなみについては、名札の着用、ボタン・リボンをつけるなどが徹底しきれないところがあるため、引き続き声がけが必要である。ネットトラブルについては、昨年より認知件数が減ったが、メディアの接触時間が多い生徒が目につく。また、今年度は、外部の専門家による情報モラル講演会をオンラインで実施し、全校生徒のモラルの向上を図った。長期休業前には重点的に全校生徒への指導を行い、特に相手のことを考えた行動をすること、一人で抱え込まないことを強調して伝えた。一方、PTA総会等の機会を通じ、保護者に対しても啓発を行った。「スマホ・インターネットの家庭内の約束」が徐々に形骸化し、利用時間が守られないなど保護者の意識はあまり高まっていないことが課題である。	B	・江中の伝統である「挨拶」「返事」「靴揃え」は定着している。学校内での取組は意識向上につながり、成果が出ているようでよいと思う。学校へ訪問した際や登校時には生徒の方から明るい挨拶が返ってくることが多くこちらも気持ち良くなる。基本モラルは日々の指導で保たれていると感じる。しかし、挨拶や返事について、社会では当たり前のスキルだが(スキル？常識？)、なぜ江中はそれを大事にしているのか、どのような場面で大切にしたいのかななどを、改めて生徒たちにわかり易く周知してみることも大切ではないかと思う。 ・昨年度まで各教室のロッカーが手狭で荷物が入りきれず煩雑に見えたが、ロッカーを増設したおかげでようやく整理整頓が可能な環境になった。そういう環境を整えるのは大事である。 ・ネット利用については、年々利用時間が増加傾向にあり、子どもたちが目にする情報量が増えているが、現実味のない、無意味な内容も少なくない。また、学習や体調面にも少なからず影響が出ているのではないかと危惧している。家庭でのルール作りも形骸化し、なかなか守られていないのが現状である。使い方の適切な判断・取舍選択を本人がしていかなければならないという危機感やリテラシーが必要であるが、保護者の意識の低さが目立つ。家庭内のことは保護者の協力や理解がないとできないので、もっとPTAを通じてしっかり啓発してもらいたい。 一方で、スマホ等の利用について、保護者アンケートの家庭でのルールはさほど悪い数値ではない。とすると、「これくらい問題ないのでは？」の価値観が変化していると思われる。「こうなったらまずい」という事例を学ぶ機会を増やすことで自己判断できるようになればと思う。 やはり、情報モラル講演会には保護者の方の参加を呼び掛け、時間制限だけでなく、利用方法や活用順位なども生とともに学習し訓練できる機会となるとよいかもしれない。それが無理であれば、その情報を保護者にも提供してほしい。	B
					B	生活習慣、規範意識が向上				
					C	生活習慣、規範意識が向上せず				
					D	生活習慣、規範意識が下降				
④健康の増進・体力の向上	学校保健及び食育の推進	学校保健計画に基づいて、生徒の自己健康管理力の向上を図る。また、「食」に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけさせる。	疾病予防等の指導や「食」に関する指導を通して、自己健康管理力の向上と健やかで逞しい心身の育成に努める。	1日のスタートの要となる朝食摂取について、昨年度までの朝食摂取の取組を土台に、朝食の内容の充実を図るための取組を行う。栄養教諭と連携を図り、家庭科や学級活動で指導した内容を長期休業中に家庭で実践する場を設定することで、生徒及び家庭への啓発を行う。	A	積極的な健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が定着	夏休みと冬休み中に「朝食チャレンジ」の課題を出した。今年度も「1週間分の朝食の記録を書くこと」、「朝食を自分で、または家族と作ってみること」の2つのチャレンジを設定したが、夏休みは「栄養教諭の方のおすすめレシピ」、冬休みは「バランスのよい朝食へのステップアップ法」を紹介し、生徒が取り組みやすくなるよう工夫した。 また、冬休み前には3年生の1学級で「バランスのよい朝食にステップアップしよう」というめあてを掲げ、学級担任と養護教諭による授業を行った。生徒たちは今よりステップアップした朝食にするために、「前日の夜に残ったおかずや汁をとるようにする」「いつも冷蔵庫にある納豆やヨーグルトを食べる」「早起きして早めに準備を終わらせてごはんを食べる」など具体的な目標を立てることができた。このとき立てた自己目標を実践する場として冬休みのチャレンジを行った。授業の事前アンケートと冬休みの朝食チャレンジ結果を比較すると、バランスのよい朝食である「主食+主菜+副菜」を食べている生徒が「12.9%」から「36.4%」と増加し、朝食を食べていない生徒も「12.9%」から「3.0%」に減った。さらに本学級は夏休みの朝食チャレンジにおいて、「主食+主菜+副菜」を食べている生徒の割合が学年・学級別に比較すると最も低かったが、冬休みのチャレンジでは本学級のみこの割合が増加したことも分かった。また、朝食作りでは、保護者の方のコメントから、「見た目も味もとてもよかった」「一緒に朝ご飯を楽しくつくることができた。これからはたくさんお手伝いをしてもらおうと思う」など好意的に見守ってくださった様子が出た。来年度も長期休業中の取組に改善を加えながら、栄養教諭などとも連携し、生徒自身が考え、取り組める内容の工夫をして生活改善やその定着を図っていきたい。	B	・食育の重要性を考える上で「朝食チャレンジ」は大変意義のある取組である。家庭で保護者の方とともに楽しく取り組んでいる様子が伺える。毎年、長期休業期間に、生徒が取り組みやすい課題設定やアドバイスをするなど工夫されたことで、生徒自身の意識向上など効果が出ていると思う。また、保護者が好意的に感じてくれていることがとても素晴らしく、生徒のモチベーションアップにつながり、目標の達成に相乗効果が表れているように思う。また、興味をもたせる→実践する→チェックするのパターンで成果が出て良いと思う。興味をもたせる視点を常にブラッシュアップしていくことが大事である。今後もこの取組を継続していくためにも、作ったものやポイントを皆に共有する仕掛けもよいかもしれないし、レシピのアレンジ部分で自由度をつくって、そこでやったことを共有すると考えてみてほしい。教職員にも同時期にチャレンジをしてその成果を生徒に示すこともしてみると、より一層良い効果が現われるのではないかと思う。 ・アンケートの結果から、授業で具体的なめあてを掲げ実践をするという工程があることで、バランスを意識した食事に積極的に向き合う子が増えることがわかる。授業での取組は、3年生の1学級ということで、年齢や時間なども考慮されたちょうど良いタイミングで行われていると感じた。食事は忙しい中でも人生において一番大事に考えなければいけない部分であるため、今後も生徒自身が主体的に取り組めるよう尽力していただきたい。しかし減ったとは言え、まだ3%の生徒が朝食を食べずに登校している。ぜひ100%になるよう努力していただきたい。	B
					B	自己の健康管理により、健康に配慮した朝食摂取が習慣化				
					C	自己の健康管理に努力が必要				
					D	健康管理が不十分				
	体力の向上	体力向上に係る体育的活動の推進に努め、生涯に渡る健康なライフスタイルづくりを推進する。	運動の合理的で豊かな実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	健康なライフスタイルを確立するため、家庭での健康・体力づくりを行う。体育の授業において保健分野からの指導など授業改善に努めていく。長期休業前に、体力づくりの啓発を行い、家庭との連携を図る。	A	目標を立て計画的に健康・体力づくりを実践	多くの生徒が運動の必要性を理解し、意欲的に運動に取り組む姿勢が見られた。昼休みにも校庭や体育館に集まる生徒が学年問わず多かった。長期休業前は、家庭でも運動を継続するように体育科が中心となって呼びかけた。1日に30分以上運動を実施する生徒が多く見られた。 今後、より計画的に健康・体力づくりが実践できるように、授業中に家庭でも取り組める運動例を紹介したり、タブレット等を活用し、家庭でも運動のポイントが確認できるように工夫していきたい。	B	・この取組はここ数年に渡って継続的に取り組み、定着してきている。夏休みなどでも30分以上体力づくりに取り組んでいる生徒が増えてきている事は喜ばしい。学校側が、生徒に対して気軽に取り組みやすいような具体例を示していることも定着につながっていると思う。今後は、生徒それぞれが目標をつくって、それにあったパターンが選択できれば、よりよい。運動系の自己管理アプリと連携できたら更によい。生徒がやりたくなる仕組み、継続したくなる仕組みの構築に期待する。また、どのような健康・体力づくりをしているかの調査をすることによって、他の生徒の参考にもなると思う。	B
					B	計画的に健康・体力づくりを実践（1日30分以上）				
					C	計画的に健康・体力づくりを実践（1日15分以上）				
					D	健康・体力づくりが不十分（1日10分未満）				

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指	評価基準	自己評価		学校関係者評価	
						達成状況	評価	考察	評価
⑤安全管理・指導	学校安全の推進	安全で安心な危機管理体制の確立に努める。	危機管理マニュアルの改善とともに、毎月安全点検を実施し危険箇所の修理等を迅速に行う。	危機管理マニュアルの見直しと、毎月15日の安全点検を生徒とともに実施・点検し、修繕・修理を迅速に行う。 食物アレルギー対応委員会を組織し、実態と対応を把握する。	A マニュアル改善、点検・修繕等を迅速に実施し、安全推進 B マニュアルの改善、点検・修繕等を迅速に実施 C 点検がきちんとでき、必要に応じ修繕・修理 D 点検はきちんとできたが、修繕・修理が不十分	市教委と連携しながら校舎内外の修繕要望を提出し、改善・改修を進めているが、要望以外での早急な修繕が必要なところや修繕費用が高額となる場合もあり、思うように進んでいないことが現状である。 今年度も危機管理マニュアルの見直しを図るとともに、養護教諭を中心にSCや栄養教諭と連携を図り、カウンセリングやアレルギー面談の時間を設けて、丁寧に対応するなど安心安全な体制を構築できている。	B	・この校舎は経年劣化や海からの強い潮風にさらされるため、破損や故障が多く見られるようになり、生徒を危険から守るためにもより綿密な安全対策・危機管理対応が必要になると思う。市教委はもちろんのこと、生徒の協力も得ながらの危険個所の発見、施設設備の改善などを充実していただきたい。今年度は、特に3階の中庭の塀の危険性を確認し、柵を設置することによって未然に危険を回避することができたのは日頃の安全点検の成果であると思う。また、修繕が追いつかないところは生徒にも近づかないなど危険意識をもってもらいたいし、保護者にも来校時に現状を認識してもらい、周知・連絡してもらうことも必要である。 ・毎年であるが。危機管理マニュアルは、様々な場面を想像し臨機応変に見直しを図り、緊急時に即対応できるようにしてほしい。 ・アレルギーをもつ生徒たちに養護教諭を中心に一人一人面談し、丁寧に対応できたことは大変評価する。今後も情報を早期に把握し、保護者や小学校とも連携し、個々に応じたよりきめ細かな対応の継続を望む。	B
	安全対応能力の向上	安全意識を高め、危機回避能力、危機対応能力の向上をめざす。	学校事故、交通事故や薬物乱用等の防止教育を徹底する。	危機回避力習得のための講話、実習等で、生徒の安全意識の向上を図る。特に、自転車通学生の交通マナーを遵守させる。避難訓練については消防署等と連携して計画的に実施する。	A 危機回避の講話、実習等の実施で安全意識が向上 B 危機回避の講話、実習等を実施 C 危機回避の講話、実習等を一部実施 D 危機回避のための講話、実習が不十分	避難訓練は、1学期は火災、2学期は地震、3学期は浸水と計画を立てて実施している。生徒は、1学期よりも2学期というように訓練の大切を理解しながら取り組んでいる状況である。危機管理マニュアルや職員の反省をもとに、避難指示の仕方や生徒の点呼の仕方などを何度も確認しながら実施している。 1年生を対象に4月に交通安全教室を行っている。今年度は、警察の方との連携がうまくいかに、職員による講話を実施した。全体として一人一人が安全の意識をもち登下校しているが、地域の方々から交通マナーについてご指導いただくこともあり、その都度全校に安全指導を行い、意識を高めるようにしている。 また、昨今問題となっている『闇バイト』について、クラスに注意喚起のポスターを掲示したり、実際の例などを紹介したりするなどして、生徒に注意を促した。	C	このところ各地で予想もしない災害が頻発している。生徒もニュースなどで情報を得ていると思うが、災害はいつどこで起こるかわからないという認識のもと、災害の種類に合わせて綿密な計画のもと、避難訓練を各学期実施された。生徒も訓練の重要性を理解し、真剣に取り組んでいたようだ。訓練で得た改善点や生徒の意見を今後の取組に活かすとともに、生徒一人一人が自主的に適切な避難行動をとれるよう、しつこいくらいの実施を望む。加えて、引き続きの避難訓練の実施、危機管理マニュアルの確認・更新と安全対策に尽力していただきたい。 ・自転車の交通安全教室は、警察と連携を必ず図り、年度初めには実施していただきたい。特に新1年生の自転車の運転は不慣れな生徒が多く見られ、事故に遭わないか心配になる。自転車の交通ルールは、学年が上がるにつれて守られていない生徒が多く見受けられる。自転車も罰則が厳しくなり、事故時の過失割合や賠償責任も車両と同等になっている。マナー観点より法的ルール観点からしっかり指導してほしい。特に一旦停止が守られていないようだ。自転車が軽車両であるとの認識が足りないと感じる。大きな事故にならないためにも指導を徹底していただきたい。また、登校時にスピードを出して学校に向かう生徒を見かける。遅刻しないように急ぐらしい。時間に余裕をもって登校するように注意を呼び掛けたがなかなか改善しないようだ。誰のための危機回避か、生徒自身が気づき、理解してくれるようになってほしいと思う。併せて、地域の目があることを良い意味でも啓発の意味でも、生徒にしっかりと認知してもらいたい。	C
⑥特別支援教育	校内・特別支援体制の充実	特別支援教育の校内体制を整備し、個別の教育ニーズに対応した指導・支援を充実させる。	適切な実態把握をもとに作成した個別の指導計画及び個別の教育支援計画により、支援を充実させる。	諸検査や複数の教員での観察など実態把握を行った上で、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し、遂行する。	A 個別の教育支援計画、個別の指導計画について全教職員で共通理解をして遂行し、成果が表れた。 B 個別の教育支援計画・個別の指導計画について全教職員で共通理解をし、遂行した。 C 個別の教育支援計画・個別の指導計画について全教職員で共通理解をしたが、遂行は一部の教員にとどまった。 D 個別の教育支援計画・個別の指導計画について全教職員の共通理解にとどまった。	年度当初の職員会で個別の教育支援計画や個別の指導計画について共通理解を図った。しかし、具体的な支援内容についての共通理解は各担任により差があった。職員会ごとに担任より、個別の教育支援計画や指導計画の内容に沿った情報提供を必要に応じて行ったが、実際に関わったのは教科担当や学年部など一部の教員にとどまった。来年度は、職員会の議題としてそれぞれの計画の説明を担任に求めるなど組織的な動きをしていきたい。	C	・特別支援学級および通級指導教室利用者の生徒を対象にした生徒に合った個々の支援体制や指導計画が綿密に出来ていることは大変評価できる。特別な支援が必要とされる生徒は年々増加傾向にある中で、その対応は大変とは思いますが、個々の生徒に対して将来を見据えた支援計画を作成し実施しておられることも素晴らしい。全教職員が支援内容についての共通理解をもって生徒に接することは組織として重要なことであると思う。これからも一人一人の生徒が充実した学校生活が送れるように、組織として取り組み、支援を充実してほしい。 一方で、個別の対応には様々なパターンや段階があり、計画通りという言葉に当てはめると一定の先生に対しての負担が大きくなると思う。今後、職員会議での計画説明だけでなく、教職員間での意見交換や情報共有の機会などがあると意識の向上に繋がり、連携もより強化されるのではないかなと思う。また、複数名のチームで支援に取り組む体制をとることで業務の分散を図ることができ、一部の先生に負担が偏ることのないような体制をつくるのが可能なのではないかなとも考える。 加えて計画を組織内でどこまで共有すべきか、本当にA、Bのレベルまで必要なのが実際に分からない。必要であれば対応、そこまでもなければ、評価基準を変更してもよいのではと感じる。	C
	関係機関との連携、他校との交流の推進	教育、医療、福祉等の関係機関と積極的な情報交換を行うことによって、連携を強化する。	医療、福祉等の関係機関、近隣の特別支援学校と積極的な情報交換を行う。	関係機関、近隣の特別支援学校等との定期的な連絡体制を整える。	A 各自に必要な間隔で定期的な連絡を行い、支援方法が具体化された。 B 各自に必要な間隔で定期的な連絡を行った。 C 学期に1回以上の連絡を行った。 D 連携、連絡とも不十分だった。	今年度、特別支援学級に入級した生徒は入級する状況や背景が複雑な生徒が多く、教育委員会や医療機関と昨年度以上に密に連携を取りながら、支援を進めた。校内で検討した支援方法について、あらかじめ医師に相談をした上で、実行するように心がけた。中には時期尚早ということを指摘され、実行しなかった支援もあった。また、支援に対する生徒の反応を見たり、生徒本人や保護者の意見を聞き取ったりしながら支援方法を適宜変更した。	B	・特別支援教育を求める子どもの数は10年前よりおよそ2倍になり、複雑な事情をもった生徒が多く、その対応に大変だったと思うが、昨年度以上に関係諸機関との連携を密に取りながら、その生徒に合った支援が進められたことは大変評価できる。その中で、時期尚早という指摘があったようだが、早くから教員間で共有することや意見交換等を行うことで生徒が生きやすさを感じてくれるかもしれないので、連携を取り続けてもらいたい。また支援をしていく過程で、生徒や保護者の意見を取り入れながら支援方法を柔軟に変更していったことは生徒に寄り添うきめ細やかな対応をされていると思う。学校側の不断の努力に敬意を表す。	B

評価項目	領域	中期目標	短期目標	取組・成果指 標	評 価 基 準		自 己 評 価	価 学 校 関 係 者 評 価	価
							達 成 状 況	評価	考 察
⑦ 研修	校内研修の推進	校内での研修を計画的に行い、授業力の向上に努める。そして、生徒の「主体的に取り組む力」を育成する。	校内研修の充実により、「個別最適な学びの場の設定」「自分の考えを広げ、深められる協働的な学びの場の設定」「各教科のアクションプランに基づいた授業改善の取組」を実践し、授業力の向上をめざす。	校内研究の視点：授業改善アクションプランの具体的取組①「めあて」「見通し」「振り返り」の効果的な提示、活用②ICT機器を活用し、「協働的な学び」の場を意識した授業づくりをもとに授業実践を進めるとともに、校内研究授業を計画的に行い、観察シートも活用して教職員同士が学び合う機会を設ける。	A	1人1回以上の公開授業の実施によりICTを使用した授業力が向上	C	C	・授業改善アクションプランの取組である「めあて」「見通し」「振り返り」の効果的な提示・活用を意識して授業に取り入れ実践できていることは評価できる。生徒への授業の理解に良い効果が表れたのではないかと思う。しかし、生徒アンケートでは「めあて」「振り返り」についての評価が2学期に下降傾向にあり、職員アンケートの評価とのギャップが気になる。生徒一人ひとりに伝わるよう、効果的な提示方法を検討してみることも大事ではないだろうか。また、授業の質や質問への回答を含め、授業改善の3つの柱を意識したわかりやすく効果的な授業づくりを組織でフォローする仕組み等も考えていただきたい。 ・ICT活用のスキル向上のため、半数以上の教員が公開授業を実施し授業力を高めあったことは評価できる。日々進化しているICT機器を使いこなしていくことは、職員にとっても大変だと思うが、研修を通して自身のスキルアップにつなげてほしい。また、やむを得ない事由により、公開授業の活用の不備を述べておられるが、「個別最適な学び」「協働的な学び」の推進の項で示されている通り、ICT活用の授業に積極的に取り組んでおられ、種々の研修も行われている様子。今後はスケジュールリングの難しさも想定できるが、本来の公開授業のもつ意味に即した実施を望む。
					B	1人1回以上の授業または指導案の公開を実施			
					C	授業または指導案を公開			
					D	公開授業を実施できなかった			
⑧ 保護者・地域住民等との連携	情報公開の推進	学校教育の内容や計画を広く情報発信する。	学校だより、学級通信等を定期的に発行し、ホームページの更新を適宜行う。	年間計画に沿って、学校だより、ホームページ等で定期的に情報を提供する。ホームページについては、載せる内容について教職員から意見をもらい充実させていく。また、メール配信システムを活用し、ペーパーレス化を少しずつ図っていく。地域への情報発信を実施する。	A	学校だより、学級通信、HP等による有益な情報を定期的に発信	B	B	・今年度テトルでの保護者への連絡配信が始まり、学校側の経費や時間的負担がかなり軽減されたのではないかと思う。学校評価委員への連絡もネット配信となり、便利になったと思う。ホームページも毎月更新され、充実した内容や見やすいレイアウトにより学校の様子がよくわかるようになり、色々な情報を的確に得ることができた。ただ、紙媒体との兼ね合いを図りつつ、完全ペーパーレス化への移行・試用期間ととらえ、配信された文章が見にくかったり生徒への周知が難しい等システムの改善も必要で、今後も市教委と連携しながら内容吟味や精度の向上を望む。また、有効的な活用法について、保護者への定期的なアンケートを行いながら工夫していけるとよい。一方で、ドコモのキャリアメールで登録するとメールが拒否されたので、メーラーのセキュリティにひっかかるケースもあることの情報も集めて、登録がうまくいかないケースを網羅しておくこと今後の対応がスムーズにいくと感じる。 ・ホームページやPTA広報誌を校区内のコミュニティや民生児童委員に配付するなど、地域への情報発信を行っているが、まだまだ地域住民への情報発信が不十分で中学校が身近な存在ではない。校区内にある公共施設やスーパーなどにもPTA広報誌を置かせてもらうなどの方法を検討し、地域の方へこれまで以上に中学校の情報を届けてほしい。
					B	学校だより、学級通信、HP等を定期的に発行・更新			
					C	学校だより、学級通信等を定期的に発行、HPは時々更新			
					D	学校だより、学級通信等を定期的に発行、HPは更新できず			
	学校間の円滑な連携・連動の推進	異校種間の連携・連動を図り、生徒の人間力の向上をめざす。	小中の連携・連動を密にして、学校間の円滑な連携に努める。	小中の交流(情報交換会、特別支援学級の授業公開等)を積極的に行う。また、異校種間の共通課題の克服のため保護者への啓発活動をより進める。	A	小中の計画的な交流(情報交換会、特別支援学級の授業公開等)により連携が充実	C	C	・今年度も小中の連携において「授業・部活動体験」を計画・実施された。小学生が不安なくスムーズに中学校生活に入れるようになるよい試みである。近年様々な支援を必要とする子どもが増えているが、事前説明と体験などを計画して、その子の進路選択の参考になっているのは大変評価できる。また、情報モラル講演会の開催等、大変多忙の中取り組んでおられる様子であるが、実際に移動したり、オンラインで行ったりなど、活動内容によって、無駄や負担が省かれているようでよいと思う。 ただ、校区内連携の特別支援教育コーディネーター部会が開催されなかったことが気になる。それぞれ個々に情報交換はしていると思うが、部会で話し合われる指導に活かせるヒントや具体的な事例や対策などの情報が得られる貴重な機会であり、それが生徒や保護者に伝わるよう努めることで安心してスムーズな移行に繋がると思うので、来年度はぜひ開催してほしい。集まるのが難しいなどの理由であれば、オンライン会議などでの開催も視野に入れて計画・実行してほしい。 ・部活動の連携移行の取組については、はじめは様々な意見が上がると思うが、実践しながら改善点を見出しブラッシュアップしていけるよう学校地域家庭が一丸となって進めていけるとよいと感じる。
					B	小中の計画的な交流(情報交換会、特別支援学級の授業公開等)を積極的に実施			
					C	小中の交流(情報交換会、特別支援学級の授業公開等)を実施			
					D	小中の計画的な交流(情報交換会、特別支援学級の授業公開等)が不十分			
</									